

訳者あとがき

本書『ヨーロッパの言語と国民』は、Daniel Baggioni, *Langues et nations en Europe*, Paris, Payot, 1997 の全訳である。

著者のダニエル・バッジオーニは 1945 年生まれ。フランスのプロヴァンス大学（エック・マルセイユ第一大学）言語学教授在職中の 1998 年に交通事故のため死去。『ヨーロッパの言語と国民』は遺著である。バッジオーニは、フランス語圏やクレオール語をフィールドとした社会言語学関係の業績を多く残した。主な著書に、『オーストラリアのフランス語圏と多文化主義』（1987 年）、『レユニオン・クレオール語＝フランス語辞典』（1990 年）、『逆説的フランス語圏としてのモーリシャス島』（1990 年、ディディエ・ド・ロビヤールと共著）、『フランス語圏空間における多言語主義とその展開』（1992 年、ルイ＝ジャン・カルヴェ、ロベール・ショダンソンと共著）などがある。

『ヨーロッパの言語と国民』は、それまでフランス語圏に関する論考の多かったバッジオーニが、考察の矛先を一気に、六角形の本土フランスを含む全ヨーロッパに向けた最初（で最後）の著作となった。これは、15－16 世紀のルネッサンス期から 20 世紀末の現代に至る長い歴史的時間軸と、大西洋からウラル山脈に至る広い地理的空間軸とをダイナミックに掛け合わせ、「ヨーロッパの言語と国民」の壮大な「歴史社会言語学」的俯瞰を試みるという、著者本人の言葉通り、まさに「野心的な」企てを実行に移した労作である。

本書の構想の背景には、当然ながら、ベルリンの壁の崩壊、ソ連解体、EU（欧州連合）の拡大、グローバリゼーションの進展、インターネット時代の幕開けといった、1980 年代末から 90 年代にかけて起こった世界史的な大変動がある。本書の要所要所で、第一次世界大戦後の地政学的大変動を背景に発表されたアントワーヌ・メイエの『新生ヨーロッパの諸言語』（初版 1918 年、第二版 1928 年）が、繰り返し参照されるのも、世界構造の激変という状況的な相同性の中で、社会言語学の立場からどのような歴史的考察が可能なのかという意識の共有があるからであろう。また、本書の企図が、一方でナショナリズム論や国民国家論の豊かな蓄積を背景にし、他方で社会史・技術史といったアナル派歴史学の業績を背景にしていることも、「序」で列挙される人物たちの名前、あるいは、各所で引用されるテキストから明らかであろう。

本書を一貫するテーゼを敢えて単純化すれば、ルネッサンス期から 20 世紀末にかけてヨーロッパは、全体として、単一言語（ひとつの国語）による国民国家によって構成される空間へと「舗装」されていった、という命題である。この大規模な「舗装」運動の進展を、バッジオーニは「エコ言語革命」という用語で概括している。「エコ言語」とは、バッジオーニによれば、言語のエコノミー（経済・構造）とエコロジー（生態・環境）を同時に含意した便宜的な概念である。15－16 世紀のルネッサンス期の西欧では、エコ言語的システムは、印刷術と宗教改革（および反宗教改革）の普及によって、ラテン語から土着語へと大きく変化する（第一次エコ言語革命）。その後、16 世紀半ばから 18 世紀末までに、それ

ぞれの土着語は、「規範化 - 標準化」のプロセスをたどって、共通語としての安定化の道を進んでいく。そして、19 世紀になると、全ヨーロッパ規模で、帝国・領土国家から国民国家へという政治的プロセスに平行して、共通語が国語の地位へと変化する（第二次エコ言語革命）。帝国・領土国家の共通語から国民国家の国語へという「舗装」運動の波は、こうして、西欧から中欧・東欧へと伝播し、20 世紀末には、その運動をひとまず終えた、とバッジオーニは見る。そして、20 世紀末における未来予測のひとつとして、世界規模での国際英語のいっそうの普及（第三次エコ言語革命）の見通しとあわせて、地域レベルのコミュニケーション言語（フランス語、スペイン語など）と、各国民国家の国語という三元構造による「共同言語制」の展望が描かれたところで、本論は閉じられている。もちろん、こうした、ヨーロッパにおける「国民国家と国語の勝利」というシンプルなテーゼから抜け落ちる例外的ケースや留保の必要なケースについて、著者は慎重な検討を付け加えることを忘れない。第 1 章で言及されるベルギーおよびスイスの複数言語制の事例とヨーロッパ各地の少数言語の事例は、結論に至って再び取り上げられ、補足的な考察が注意深く行われている。全編を通して、こうした反証やありうる反論への著者の目配りは周到に行き届いており、総論的叙述に伴いがちな強引な捨象を控えているといえるだろう。

本書は、近代ヨーロッパの言語史を国民国家の形成史と結びつけて論じた点で、きわめてユニークであると同時に、ひとつのヨーロッパ論としても興味深い。実際、著者バッジオーニは、与えられた時間と空間の範囲を、ひとつひとつ、まさに舗石を一枚一枚埋め込んでいくように、遺漏なく踏査しており、結果として、読者は、数次にわたる多様なヨーロッパの時空の旅を味わうことになるだろう。まず、第 1 章で現在のヨーロッパの国民国家と言語の状況が概観され、第 2 章で基礎的な用語の概念規定が試みられた後、第 3 章と第 4 章では、ルネッサンス転換期の西欧で、ラテン語が土着語に覇権を譲り、しかも、この土着語（共通語）の発展が国民国家の建設と軌を一にしている風景が、的確に分類されたヴァリエーションと共に展開される。続いて、第 5 章から第 7 章では、1550 年から 1800 年における共通語定着の風景が、辞書・文法書の編纂と文学作品による「規範化 - 標準化プロセス」を軸に描かれる。読者は再び、西欧の「大言語」から西欧周縁の「小言語」まで（ロマンス系およびゲルマン系から、北欧や中欧・東欧を通過して、ロシア帝国やオスマン帝国の諸言語まで）、ヨーロッパ各地における第一次エコ言語革命の長い余震の響きに耳を傾けるはずである。そして、第 8 章から第 10 章では、1800 年から 1918 年における国語定着の激しい運動が、フランス型の革命的国民国家とドイツ型のロマン主義的国民国家という対比を軸に描かれる。読者は、ここでもまた、西欧からロシアに至る「大国家」の状況、そして、中欧・東欧・バルカン半島における「小国家」や帝国支配下諸民族の状況（この場合、しばしば、前時代の西欧に見られた「規範化 - 標準化プロセス」の風景が再現される）が、数多くの固有名詞と共に語られるのを見るだろう。最後に、第 11 章で、第一次世界大戦後のヨーロッパの新興国民国家やソ連・東欧の言語政策が概観され、第 12 章では、国際語としてのフランス語の衰退と英語の上昇が語られて、現代の状況に立ち戻る。この

時空の踏査は螺旋的であり、読者は、本書をどの章のどの節から読み始めても、ヨーロッパの言語と国民国家に関する一定の風景を見通すことができるだろう。

本書の全体にわたって、著者の視点は、西欧の大言語・大国家に偏ることなく、北欧・南欧・中欧・東欧の小言語・小国家にも平等に行き渡っており、各国語の「規範化 - 標準化」に貢献した文法学者や文学者の固有名詞が淡々と列挙されていく様子は、誠実な律儀さの印象を与える。おそらく、そこには、長年、フランス語圏クレオール語の研究に従事した著者バッジオーニの、中心を相対化する思考態度が反映されているはずである。

1997年に原著が刊行されてから、およそ十年が経過した。この間、「ヨーロッパ」は東へと大きく拡大した。2004年5月、欧州連合は、それまでの十五カ国から、新たに十カ国を加えて、二十五カ国となった。バルト三国からポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、スロヴェニアまで、中央および東部ヨーロッパの三日月地帯が一気に加盟し、さらに、近い将来、ルーマニア、ブルガリア、クロアチアといった諸国の加盟が予定され、遠くは、トルコの加盟もタイムテーブルにのぼっている。一方、旧ソ連陣営のウクライナ、グルジア、アゼルバイジャン、モルドヴァは、ロシア離れを強め、欧州連合やアメリカ合衆国との関係を緊密化しつつある。バッジオーニが考察の対象とした「大西洋からウラル山脈まで」に至る広大なヨーロッパにおいて、欧州連合を軸にした国家間ネットワークの再編は、実に早いスピードで進んでいるように思われる。また、「ヨーロッパ」のブロック化と並んで、よりグローバルなレベルで注目される現象が、本書でも少しだけ言及されていた「インターネット」の普及である。この十年間において、インターネットは、驚異的なスピードで世界に普及し、情報の伝達と収集に必要不可欠な手段として、生活風景を一変した。こうした過去十年の世界的な変化は、いずれも、バッジオーニの問題意識の延長線上にある。というのも、欧州連合は、「ヨーロッパ」という舗装面を構成するひとつひとつの舗石としての「国民国家」の共同体であり、また、インターネットは、各「国語」の翻訳可能性の問題を日常的に鮮明化する場に他ならないからである。ヨーロッパが欧州連合として世界における重要性を増し、諸言語がインターネットの普及によってその相互翻訳の機会を緊密化している中で、改めて、ヨーロッパの「言語」と「国民国家」の生成論的關係史を読み直すことには、十分なアクチュアリティがあるだろう。本書が歴史社会言語学の専門書としてだけでなく、ユニークなヨーロッパ論としても読まれる価値のある所以である。

本訳書の作成に当たっては、東北大学大学院文学研究科言語学専攻分野教授の後藤斉氏に、貴重なご教示をいただいた。訳者の未熟な訳稿に目を通され、細部にわたって正確なご指摘をくださった後藤氏に、この場を借りて深く感謝の意を表したい。その上でなお訳語の不適切の責が訳者にあることは言うまでもない。そして、訳者の怠惰のために遅々として進まぬ翻訳作業を忍耐強く見守り、常に絶妙なタイミングで激励をくださった筑摩書房の高山芳樹氏に、あつく感謝する。

2006年8月

今井 勉